

編集後記

来たる 11 月 25 日 (土) の午後, 日本図書館研究会事務局会議室を会場に 2023 年度の I-LISS Japan Chapter の研究大会が行われます。原田安啓氏による「奴隷解放宣言から公民権運動期に見る全米大陸の黒人図書館員の道のり Part2」と, 大城善盛氏・浅川功治氏による「20 世紀以前のアメリカの公立学校の図書館」の 2 件の発表が行われます。また, I-LISS 会長である呉東根氏から, *Current Status and Future Prospect of Korean Public Libraries, with a special regard to after-COVID 19 Pandemic Situation* というテーマで記念講演が予定されています。どなたでも, 非会員の方でも無料で参加できます。ぜひお越しください。

来年の I-LISS 国際大会は, フィリピンで 8 月半ば以降に行われる予定です。フィリピンは図書館員の養成・研修制度が充実しているなど, 学ぶところの多い国です。関空からは 4 時間半で到着します。日程が合えば私も必ず参加しようと思っています。

そして, 2026 年度の I-LISS 国際大会は日本で開催予定となっています。開催には皆さんのお力が必要です。今思いつくだけでもプログラム委員会と実行委員会が必要ですし, 実行委員の中でも, 会計・広報・登録受付・会場・企業展示・懇親会などの担当が必要になってきます。また, 当日に手伝って頂ける方は多ければ多いほどありがたいです。どうかよろしくお願いします。

日本でも外国でも「図のキャプションは下, 表のキャプションは上」でしたし, 本誌でもそのようにしてきました。ただ, APA スタイルでは, 2021 年には「図のキャプションも上」に変更されています (<<https://apastyle.apa.org/style-grammar-guidelines/tables-figures/figures>>)。今まで全くお知らせしてきませんでしたが, 本誌もこれに合わせて, 2022 年から図のキャプションを上に出しています。もちろん, 日本では書名を 2 重かぎカッコでくるなどの日本の慣行があり, 本誌でも基本的にそのようにしています。これは当然 APA スタイルとは異なりますが, 私は変える必要はないと考えています。日本の慣行と国際的な慣行のバランスは悩み続けます。

最近, いろいろなところに自分の原稿を掲載することができ, ありがたい限りです。そして, 当たり前なのですが, 各誌ごとに書式が細かく定められています。例えば, 『メタデータ評論』は「節 (第 2 位の中見出し) 以下の中見出し・・・10.5 ポイント (左詰め, 節に限り上のみ 1 行空け)」, 『世界華語学校図書館論壇論文集』は「第二層標題則請使用粗體字型, 點數 11」, 2023: *ALISE Proceedings* の本文は “indent the first line by 0.5 inches.” などです。これでリジェクトされたくはないので私は頑張って設定しますし, カメラレディなら仕方ないとも思います。ただ, 実際に掲載されたものを見ると, 定められたものから変えてポイント数も手を入れていただいているときもあり, それならそれほど入念にチェックしなくても良かったのではと複雑な気持ちになります。

本誌では, L^AT_EX というシステムを用いて, 編集委員が組版しています。Word でも L^AT_EX でも一太郎でも, 好きなソフトで投稿していただければと思いますし, 書式を細かく設定して頂く必要はありません。投稿先を選ぶ 1 つのポイントにしていいただければと思っています。

(編集次長 岡田大輔)